

## コロラド州：小麦作柄と気象状況

2004年8月10日(最終)

### 2004年8月8日現在：

コロラド州の2004年産冬小麦の収穫は、8月8日迄に全州にて完了した。収穫作業は昨年より多少遅れたが、略平年並みの完了であった。

### 2004年産冬小麦の概況（纏め）：

コロラド州の2004年産冬小麦の播種は、2003年8月下旬に於ける東部平原の土壤水分が不足状態であり、2003年産より多少遅く、9月初めより開始された。9月7日の段階で、コロラド州冬小麦圃場の凡そ11%（5年平均：10%）にて播種が完了した。その後、播種作業は順調に進み、10月5日の段階で全州の95%にて完了した（昨年：87%、5年平均：87%）。土壤水分の不足した圃場では小麦の出芽は不揃いであった。10月19日の段階で播種は全州にて完了（昨年：99%、5年平均：99%）し、全体の84%にて出芽した。土壤の水分不足と低温の為、出芽は昨年並びに5年平均より多少遅れ気味であった。11月9日まで降雨は少なかった。例年であるところの時期には100%の圃場にて小麦は出芽しているが、2004年産小麦の出芽は93%であった。小麦の根の生育も土壤水分不足の為良くないと報告された。

2003年12月並びに2004年1月の気象は、低温・乾燥であった。コロラド州の1月の降雪量は少なく、特に小麦生産地帯の州東部平原では1月末迄降雪は無かった。1月末から2月末迄の降雪は平年並みか多少平年を上回り、積雪量は平年の94%までに回復した。2月末の小麦の状況は、州東南部では平年以下、北東部の小麦は平年並みであった。

3月下旬からの気温は平年以上となり、冬小麦は3月末には休眠から覚め“Green up”し、4月4日には全体の10%が既に節間伸張期にあった。例年ではこの時期では1%程度が節間伸張を開始する。4月の天候は温暖・湿潤、山岳部では降雪が有り、土壤水分は改善された。小麦の生育状態は4月の降雨でかなり改選した。

5月の気象は、湿潤・低温と高温・乾燥を1週間毎に繰り返した。小麦は昨年並びに平年より1週間以上早く5月初めに穂を出穂を開始した。5月16日の段階で45%の圃場にて出穂（昨年：24%、5年平均：23%）した。日中の気温は平年並みであったが、5月13日の夜間に氷点下を記録した。小麦への凍害の被害が心配された。5月下旬に向かい気温は上昇し、5月23日現在で85%の小麦が出穂した（平年：50%）。この頃になり5月13日の低温による被害が一部の小麦に現れだした。

USDAの5月1日付け生産量予想では、コロラド産冬小麦の平均予想単位収量は30.0ブッシェル/エーカー（昨年実績：35.0ブッシェル）であった。

5月の降雨は平年を下回り、土壤水分を悪化させた。5月末までに略全圃場の小麦が出穂した。

6月初めに州南部のSan Luis Valleyにて氷点下を記録。東部平原では雷雨が散発したが、土壤水分の改善には至らなかった。6月2日現在小麦の8%が枯熟に達した。殆どの小麦が、乳熟期以降であった。6月13日現在全体の38%がの登熟期に入った。これは昨年の30%、5年平均：33%より1週間早い進捗であった。作柄は例年より悪いと発表された。

6月1日付けUSDAの生産予想では、単位収量は5月1日と変わらず30.0ブッシェルであった。

6月中旬以降コロラド州の天候は不順となり、雷、雹を伴った嵐が散発した。降雨も多く土壌水分の改善を見たが、成熟後期の小麦にとっては多少遅い降雨であった。この時期の降雨は小麦の枯熟を遅らす結果となった。6月22日の段階で、完熟した小麦は18%（昨年：18%、5年平均：29%）であり、平年より遅れを示した。7月初めまで湿潤気象が続き、小麦の収穫は遅れた。通常、独立記念日までの収穫作業の進捗は、全州の3割の圃場にて完了しているが、今年は17%であった。作柄は68%が平年以下の評価であった。

7月2週目になり乾燥・高温気象となり小麦の枯熟が進み、収穫作業も捗った。7月11日には全体の39%が収穫された（昨年：49%、5年平均：59%）。

7月1日付けUSDAの生産量予想では、単位収量は更に下向修正され27.0ブッシェル（昨年事跡の77.1%）となった。1平方フィート内の穂の数が例年であれば34.2本（昨年：38.4本）であるが、今年は32.8本と発表された。

7月の高温で小麦は急速に枯熟したが、収穫作業は時々驟雨に妨げられ、平年より遅い進捗であった。7月25日に終わる週では農作業稼働日数が4.9日であったが、小麦の収穫は進み、収穫完了は94%に達し（昨年：95%、5年平均：95%）昨年のペースに近付いた。全州における収穫完了は昨年より多少遅れたが、略平年並みの8月8日の週であった。

生産量予想：

冬季から春先まで続いた乾燥気象の為、春の圃場水分は不足の状態であった。3月に気温が上昇し、小麦例年より速く3月末に休眠を覚め4月初めから節間成長を開始した。多くの圃場の小麦を十分な栄養成長が無いままに、生殖生長に押し入る結果となった。結果として小麦の穂数が少なくなった。5月中旬の低温は、生殖成長に在った一部の麦に凍害を与えた。6月下旬からの低温・降雨は、既に登熟期の後期に在った小麦には、多少遅れた降雨であった。そして、天候不順は枯熟を遅らせる結果となり、7月初めの収穫作業に遅れが生じた。雨の合間に収穫が強高された。

単位収量は、2003年産より単収は2割以上低くなる見込みであるが、早魃の年2002年産の生産量（単位収量22.0 bu、生産量：363万 bu）よりは良いと見込まれる

作付け面積と収穫面積：

	Area Planted			Area Harvested			04/03
	2002	2003	2004	2002	2003	2004*	
Unit	1,000 acres			1,000 acres			Percent
Colorado	2,375	2,630	2,317	1,650	2,200	1,750	79.5%

2004年7月1日付け農務省発表冬小麦生産量予想：

Crop year	Area Harvested 1,000 acres		Yield bushels/acre			Production 1,000 bushels	
	2003	2004	2003	2004		2003	2004
				June 1	July 1		
Colorado	2,200	1,750	35.0	30.0	27.0	77,000	47,250
US Total	34,541	34,825	46.7	43.6	42.2	1,707,069	1,469,735

**品質予想：**

品質の良かった昨年に比し、低容積重、高夾雑物、低蛋白質、高水分、低FN値の小麦が多く見られると予想される。

**2004年産作冬小麦付け品種：**

小麦農家は新品種を作付ける傾向が強く、年々様々な品種が作付けられている。2004年産冬小麦の人気品種はArkon (19.8%)であったが、過去3年減少傾向にある。第2位はPrairie Red (14.8%)、第3位はTam 107 (10.7%)、第4位はJagger (8.9%)、そして第5位がAbove (5.8%)であった。

全作付け面積に対し作付け面積比が増加した品種は、Jaggerと2003年に発表された新品種のAbove、更に第6位の品種Trego (5.8%)のみであった。

Toregoは硬質白色冬小麦 (Hard White Winter Wheat) であり、増加の傾向にある。

小麦主産地区North Eastの中心品種は、2003年ではArkonが第1位、続いてJaggerそしてPrairie Redであったが、2004年ではArkon、Jagger、Above、そしてPrairie Redとなった。

州全体の品種サベールでは15品種の名前が明らかにされているが、これら15品種以外の“Other”のカテゴリに入る品種 (主に古い品種) の作付け面積は全体の14.2%であった。

Winter Wheat: Percent Planted by Variety:

Variety	2000 crop	2001 crop	2002 crop	2003 crop	2004 crop
Arkon	24.3	24.4	25.3	22.3	19.8
Prairie Red	3.1	11.5	13.9	16.0	14.8
Tam 107	33.6	24.9	13.6	13.0	10.7
Jagger	2.1	2.9	6.7	7.7	8.9
Above	--	--	--	3.8	5.8
Trego	--	0.3	2.4	3.3	5.7
Yumar	3.0	4.6	4.8	3.6	3.6
Halt	6.6	5.1	2.6	2.4	2.6
Lamar	5.1	4.4	3.6	3.3	2.6
Alliance	1.2	1.0	2.3	1.8	2.1
Prowers 99	--	1.1	2.4	2.6	2.1
Yuma	3.9	3.2	2.1	1.3	2.1
Powers	2.3	2.9	3.5	1.3	1.9
Platte	0.5	0.4	0.8	1.5	1.8
Fairview	1.1	0.5	1.5	0.9	1.3
Others	13.2	12.8	14.5	15.2	14.2
Total	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

以上

当該作柄レポートに関するご質問等は下記までにお問い合わせ致します。

小川正晃 : Email [ogawa.max@omicnet.com](mailto:ogawa.max@omicnet.com)